



電力王・福沢桃介

今回よりリニューアルしたこのコーナーでは、二葉館に関わる人々をご紹介します。桃介は、元の名前を岩崎桃介といい、現在の埼玉県比企郡吉見町で生まれました。幼い頃から神童と呼ばれた桃介は、福沢諭吉が創立した慶應義塾(現・慶應義塾大学)に進学しました。桃介は、この学生時代に貞奴と出会っています。



野犬に襲われていた貞奴を助けたことから始まった親交でしたが、その後、桃介は福沢諭吉の次女・房に見初められて福沢家の婿養子に入ります。

明治20年、桃介は福沢家の支援でアメリカに留学し、ペンシルバニア鉄道などで西洋の事業を学びました。帰国後は正式に房と結婚し、北海道炭鉱鉄道に就職。肺結核による静養生活やその間に手掛けた株式投資などを経て、様々な新興企業の設立に関

わつたり、会社取締役を務めたり、慶應義塾の後輩で事業家の松永安左衛門と丸三商会という会社を設立したりしました。明治42年、桃介は、松永とともに福博電気軌道(後の九州電気鉄道、現・西日本鉄道)を設立し、社長に就任します。翌年、名古屋電灯株式会社(中部電力や関西電力の前身にあたる)の取締役に就任、一旦の辞任を経て、後の大正3年には社長に就任します。大正9年になると、木曾電気興業と日本水力を合併して大同電力(現・関西電力)と改称し、取締役社長となりました。その頃名古屋に建てた別邸が、現在の文化のみち二葉館です。当時は、その絢爛さから二葉御殿と呼ばれていました。女優引退後の貞奴を事業パートナーとした桃介は、大正9年に竣工したこの邸宅を中部経済界のサロンとして活用し、中部地方の電力事業に取り組みました。木曾川水系の電源開発に注

力した桃介は、次々と水力発電所を建て、大正13年には日本のダム技術の先駆的存在となる大井ダム発電所(岐阜県恵那市)を竣工しました。桃介と貞奴は、名古屋ですべき仕事が一と段落したと東京に戻ります。二葉御殿は、桃介にとつて、まさに中部地方の電力開発をするための足掛かりとして、重要な拠点だったのです。



其一

今回は、鳥についてのお話です。大広間のステンドグラス「初夏」には、2羽の鳥がいます。さてどこでしょうか。ヒントは上と下に…、そうですね。水辺に1羽です。

まずは木にいる鳥「キツツキ」です。実は「キツツキ」という名の鳥はおらず、キツツキ目キツツキ科に属する「木をつつく習性がある鳥」の総称として「キツツキ」と呼んでいるのだそうです。そこで「キツツキ」を調べてみました。ステンドグラスの鳥の名は…

最初に「アカゲラ」。北半球の広い範囲に生息しています。黒の羽に白いボデイ、赤い冠とおしりが特徴で日本でもよく見られ、一般的にキツツキというときはこのアカゲラを指すのではないのでしょうか。お次は「アオゲラ」。アカゲラは世界の広範囲に生息しているようですが、アオゲラは日本の固有種。羽は暗緑色で赤い冠、ボデイは白で黒い



キツツキ



パン

模様が入っています。それからあと3種、黒く大きな体の「クマガゲラ」日本最大のキツツキ。対して雀と同じくらい小ぶりの「コゲラ」日本に生息する中で小さい種類。最後は「アリスイ」。蟻を食べることでこの名がついたとも、まだほかにもキツツキの種類はあるようです。さて、大広間のステンドグラスを見ると羽は緑。ということは…アオゲラですね。

そして、もう1羽は水辺にいる鳥「バン」です。バンは日本でも広く見られる鳥で、東日本では夏に見られる「夏鳥」として、西日本では冬に見られる「冬鳥」として知られています。バンの名前の由来はその「鳴く場所」にあるそうです。バンはよく田畑にやつてきて鳴くので、田畑の「番」をしているようだから「番(バン)」と名づけられたとも。確かにずっと田畑にいってくれたら害虫など食べてくれそうで心強いですね！ステンドグラスの鳥は、ぱっと見でカモのようですが、日本にやってくるカモは冬の渡り鳥なので、初夏の水辺にいる鳥ということで「バン」と推察できます。

スマートフォンで検索するとそれぞれの鳥の写真が見られますので、ステンドグラスの鳥と見比べてみてはいかがでしょうか。



分館三郎記念館

今回は、名古屋千種区にある古川美術館分館三郎記念館をご紹介します。地下鉄池下駅から東へ徒歩3分、閑静な住宅街の中に古川美術館があります。

数多くの事業を成功させて時代を築いた実業家・古川三郎氏が、「私蔵することなく広く皆様に楽しんでいただきたい」という想いから、生涯にわたって蒐集した幅広いジャンルの美術品を三郎コレクション(約2,800点を礎に、財団法人古川会(現・公益財団法人古川知念会)を設立し、平成3年に古川美術館を開館しました。三郎氏は慈善家としても知られ、名古屋市内および愛知県の社会活動にも幅広く貢献しています。

そして、美術館から南へ徒歩1分坂を上った右手には私邸であった三郎記念館があります。氏の没後「わたくしが大好きなこの住まいを、みなさんの憩いの場として使っていたきたい」という遺志を受けて、平成7年に古川美術館の分館「三郎記念館(旧古川三郎邸)」として公開が始まりました。

記念館の母屋にあたる「為春邸」は急勾配の斜面に建てられた数寄屋造りで、昭和9年に棟上げされました。

趣向を凝らした各部屋には名がつけられており、随所に日本建築の粋が見られ、柱と



貫が交差する高床式の外観は桂離宮の書院造りを彷彿とさせます。巨木を大切にしていたという三郎氏は、大木には神様が宿るという信念を貫かれたそう。日本庭園には椎が茂り、その中にひっそりとたたずむ茶室「知足庵」では四季折々の自然の美しさを見ることが出来ます。記念館内の「数寄屋 de Café」ではお庭をながめながらお茶もいただけます。

記念館は、名古屋景観指定文化財に認定され、「為春邸」をはじめ6件の建造物は国の登録有形文化財に登録されています。現在は、古川美術館の活動とあわせた企画展示や茶会などの各種イベントが催されています。名古屋市内に在りながら山荘にいるような静寂のなかでゆつたりと時を過ごすのもよいものです。

9月5日から始まる名古屋お屋敷めぐり5館連携スタンプラリーでは、分館三郎記念館と、文化のみち二葉館、文化のみち種木館、旧豊田佐助邸、揚輝荘南園聴松閣をめぐってスタンプを集めると先着でプレゼントを進呈します。この機会にぜひお出かけください。

from Archives 書庫棟から 名古屋の図書館



名古屋市鶴舞中央図書館

文化のみち二葉館の文学企画展は、名古屋に寄贈された資料を活用するため、当館の書庫に収蔵されている資料を展示して開催します。企画内容によつては、図書館などの公共施設を活用して文学者について調べたり、展示のために資料を借用したりする場合があります。

名古屋市の市立図書館は、中区を除く各区に1~2か所ずつ、全部で21か所設けられています。中でも一番古くからある図書館は、昭和区鶴舞にある鶴舞中央図書館です。

鶴舞中央図書館は、大正12年、市立名古屋図書館として鶴舞公園の敷地内に開館し、令和5年に100周年を迎えました。約150万冊を所蔵し、長年収集された郷土資料も豊富な、名古屋で最大級の図書館であり、名古屋の文化を支える中心的な施設です。

鶴舞中央図書館の次に歴史あるのが、西図書館です。もとは財団法人名古屋公衆図書館といひ、大正14年、東区武平町に私設図書館としてつくられました。今年でちょうど

100年になります。創設者は、元三井銀行名古屋支店長で、福沢桃介を名古屋に呼び寄せた人物でもある矢田績です。名古屋の産業発展のために設立された図書館だったので、経済に関する蔵書が多かったそうです。作家で経済学者の城山三郎も利用者のひとり。妻・容子とはじめて出会ったのもこの図書館の前でした。名古屋公衆図書館は、名古屋市内に建物ごと寄付されると、昭和14年に市立名古屋公衆図書館と改称されました。現在の建物は、平成6年に新築されたものです。

西図書館が現在の場所に移転したのと同じ昭和40年に開館したのが、二葉館と同じ東区に建つ東図書館です。名古屋の市立図書館としては、5番目につくられました。

現在は、パンテリンドームナゴヤの北側に移転している東図書館ですが、開館当初から平成13年までは、現在の徳川町・蓬左文庫のあたりに建っていました。ドームの近くということで、野球などはじめとしたスポーツ資料の収集に力を入れている図書館です。

名古屋の図書館は、それぞれの蔵書に特色があります。館ごとの違いをくらべて巡ってみても面白いかもしれませんね。